

# 方言における“文化と社会”の諸問題

藤 原 与 一

## 目 次

- 1 方言社会即方言文化圏の成立
1. 1 大方言圏の成立
- 2 小方言社会即小方言文化圏の特性
2. 1 大方言文化圏
- 3 言語の伝播流動と周圏・周布
3. 1 周圏・周布と辺境
3. 2 辺境変移の説
- 4 方言社会の人為製作
4. 1 藩領と方言境界線
- 5 方言社会の運命

ここに、共通主題「文化と社会」がある。私は、方言研究の立場で、これにこたえなくてはならない。

考えうる、理論上の諸問題はすくなくない。しかし、それらを体系的に処理することは容易でない。今は、諸問題のいくらかを、諸問題としてとりあげてみる。

## 1 方言社会即方言文化圏の成立

方言というもの、——そういう存在は、言語の、明確な体系的存在である。そのものは、地域社会に存在する。いな、方言が存在して、その存在ゆえに、地域社会は、明白な地域社会となり得るのもある。方言存在の地域社会を、私どもは、方言社会と呼ぶ。

方言社会が、その地域性に応じて、地方的な文化圏を形成することは、明ら

かであろう。この文化圏を、方言文化圏と呼ぶことにする。地域社会は、なんらかの程度において、みな、地方的な方言社会であり、方言文化圏と見られるものである。

方言社会の成立と、方言文化圏の形成とは、同時的・同義的のことと解される。

方言社会即方言文化圏は、どのような過程をへて成立するものか。生活がちがうので、そういう対比的な差別相がひきおこされるのだと答えることができよう。人びとは、地域ごとに生活圏を形成して、方言社会を現成する。生活の集団が方言社会になる。方言文化圏になる。

生活圏、——生活集団の相違をひきおこすものには、広い意味での歴史的要因があり、また、多様な自然地理的要因がある。今は、これらの要因の分析には、多く立ち入らない。自然地理的要因の基本的なもの、たとえば山嶽というようなものが、ことに強く地域性を支えることなどは、多く言うまでもなからう。旧藩制の藩領区分というような、人為的・政治的規制（それもまた、多く、自然地理的要因などに依拠しよう。）も、人びとの生活の集団を左右し、限定し、特色づけたわけである。地域性に応じ、生活集団に応じて、方言社会はうまれてこざるを得なかった。

極端な場合としては、一個人ごとに、方言がみとめられる。一個人ごとに生活がちがうからである。個人ごとに個人社会があって、個人方言がある。

家庭社会と言え、この場合にも、当然、それなりの方言社会・方言文化圏がみとめられる。家庭が、それなりの、独自の生活圏をなしているからである。——甲の家族の形成する社会と、乙の家族の形成する社会とは、同一でなく、いわば地域性を異にし、生活圏を異にしている。

個人に方言をみとめるのと同じようにして、特定の階層にも、方言をみとめることができる。かれらはまさに、生活を等しくして、たがいにあい寄っているからである。禅家の集団に禅方言があり、素粒子論グループに理学方言がある。——そこそこに方言社会があり、方言文化圏がある。

ただ、私どもは、通常、方言を問題にする時、おおかたは、地域的存在の方

言を問題にする。以下にも、地域的地方的な方言社会即方言文化圏を問題にしていくのである。

ここで、方言を定義しておこう。——「方言は、人間言語の歴史的社会的分化事態である。」（一国語内での）

## 1. 1 大方言圏の成立

日本語の全国方言状態を見わたすと、いくつかの大きい方言分派を観望することができる。たとえば、九州方言、北陸方言というように。このような大きい方言社会即方言文化圏の成立・生成についても、私どもは、原則的には、生活がそうさせたのだと言わざるを得ない。じっさい、九州地方は九州地方なりに、独自の生活条件をせおって、一個の九州方言圏になったと見られるであろう。

どのような大方言も、その占める地域に照合してこれをうけとってみる時は、その方言圏が、いかにもそうあってよいものに思われ、合自然的なものと理解される。瀬戸内海域も、ある点では、一体の方言圏としてうけとられるのであるが、この内海域の、一つの方言文化圏をなすことも、当然うけとられる。

それにしても、上位次元の大方言の場合は、その方言の境域が、判然とはしない。一は他に、自然につながって、たがいに流通しあうさまが見てとられる。たとえば九州方言にしても、その境域、すなわち九州地方の、東北部分は、中国西部や四国西部の方言色に通うものを見せているのである。東北方言のゾーゾー弁は、奥羽の境域に限られたものではなくて、関東の、東北部分はもとより、なお、千葉県下まで、そのつづきがみとめられる。千葉県房総半島の、下総が安房に接するあたりの山地部でも、ゾーゾー弁の中舌母音が著しくて、小学生たちも、「タカナ  $\$i$ 」（高梨〈姓〉）、「サ  $\bar{k}i$ 」（先）「カン  $\bar{k}i\ \bar{n}i$ 」（鑑蹴り〈遊びの名〉）「オ  $\bar{n}i$ 」（鬼）「モ  $\$i$ 」（もし）「 $\bar{m}i$  タ」（見た）、「Fw  $\bar{\$i}\ \bar{g}i$ 」（ふしぎ）「 $\bar{t}n\ t\bar{\$i}$  ッタッテ」（なんと言ったって）などと言う。ゾーゾー弁をよりどころにして、いわゆる東北方言を、奥羽に区切ることなど

はできない。東北方言と関東方言とは、深くさしあっているのである。四国方言は、四国島に、かなりはっきりと存立して、遊離独立性の強い方言である。しかし、そうであっても、四国の東部の方言状態が、また、近畿紀州のそれに通うものを見せぬではない。（たとえば、「ミー、ネー、ダー。」〈みきちゃん、お寝よ。〉、「このひえの中には、モミ〈朶〉アレンジャ ダー。」のような「ダー」を徳島県下で言い、和歌山県下でもまた同様に言う。全国の、他の地方では、ほとんど言わないことばである。）四国方言の場合すら、そのくまどりは、きっぱりとはしていない。上位次元に立って、大方言の存立——大方言社会即大方言文化圏——を認定すればするほど、大方言間に、さまざまの流通のあるのがみとめられる。

## 2 小方言社会即小方言文化圏の特性

上記の事実とは反対に、小方言圏になればなるほど、その方言圏のくまどりが、はっきりとしてくる。——方言社会即方言文化圏は、境域のはっきりとしたものとしてうけとられるのである。小村落方言などになると、そのことがことに顕著である。山村の一部落一部落が、孤立して独特の方言圏をなしており、島の海そいの各部落が、たがいに、明確な一小方言をなしている。今日はしだいに、その傾向が消えつつあるが、それにしても、たがいに反立するおもむきの明らかなことがすくなくない。

こうして、方言ごとに、閉鎖的な方言社会ができており、閉鎖的な方言文化圏ができています。一口に言って、小方言社会には、閉鎖性という特性が指摘される。閉鎖的であるのに相応して、そこの一般の道徳律がきびしい。法律の制裁をはるかに大きく上廻って、「村の道徳」が作用していること、事例が多い。噂というもののしきりにもてはやされるのが小方言社会であり、その噂も、善美をほめるのとはちがった方向に栄える、口誅の噂が多い。

閉鎖的であるのに関連して、一方、生活文化全般の改新が、遅進的である。遅進性が、小方言社会の一特性であろう。いろいろな新風が、小方言社会に入来するたびに、家庭のむすこたちは老父母と言い争ってきた。生業上の新機具

の新購入の場合にそうだったし、生活改善のためとの台所改造の場合にそうだった。むすこたちがはげしく反発しても、ふしぎなことに、老父母は、祖父母として、そのしぶとい生活意識を孫たちに伝える。隔世遺伝である。子もりの歌やお月さんの歌などは、こうして、いつまでも亡びないで生きていく。

遅進性に関連して、一般に、後進性を指摘することができる。小方言社会の文化は、後進性を特色とする文化とも言うことができよう。

後進性の反面は伝承性である。小方言社会の伝承性という特性こそは、注目すべきものであろう。小方言社会が閉鎖的で遅進的であれば、しぜん、その伝承力は、強まることになろう。もし、一つの方言社会が、他の異質の方言社会に接触することが多ければ、当の方言社会は、飛躍的にも発展することがあろう。異質のものからの異色ある刺激を受けるからである。しかし、一般に、小方言社会は、彼我、たがいに、類型の近似を以て並存している。相互に、無刺激に静まって存在しているのである。方言文化圏の飛躍的展開の契機が、きわめて乏しい。よって、たがいに、伝承性の強い小方言圏として存在しがちなのである。伝承性は固陋性ともなっている。

伝承の内容を分析すれば、注目すべきものに、いわゆる古語の温存がある。佐賀県下の杵島郡白石町に属する旧須古村<sup>すこ</sup>の例をあげてみよう。この小方言では、昭和33年の調査で、「むかしのおやしきことば」のいくつかを聴録することができた。殿様時代のなごりが伝承されており、あるいは、それが廃語として記憶されているのである。

□オンサヲサラ （傍線は、アクセントの高音を示す。）

は、“よか きもの”のこと、絹ものことであつた。この語はすでに廃語となっている。甲斐絹など、「さをさを」と音がするので、こう言ったとのこと、いかにもと思われる。風雅な一語である。

□オサグイ

くじら <廃>

□オカベノオカズ

「おから煮しめ」のこと <廃>

□オアカ

あずき <廃>

□オムラサキ

お醤油 <廃>

□オカケモミジ

大根の葉の干したもの。ヒバ（干葉） <廃>

一々、めずらしいことばが伝承されている。つぎに、ことばづかいの注目すべきものがあった。下記のとおりである。

○ゴザ、カーン。

「ござる」かね。 <訪問のあいさつ>

○コッチ ゴザイ。

こっちへおいでなさい。

○メシアガイ。

おあがりなさい。（飲食） <廃>

○オクダシンサイマッシェ。

下さいませ。

○コン ゴロージ ラーイ。

○コン ゴロージライ。

これをごらんください。 <廃>

○ソギャン シテ メシヨカイ。

○ソガン シテ メシヨカイ。

最後例には、「召しおかれい」の言いかたと思われるものが見える。先方の人は、この文例を、「そのまま して おきなさい。」とも言いかえてみせてくれた。<廃> 以上のようなのが、“ムカシノ「オヤシキコトバ」バンダ。”というわけである。“オヤシキコトバ バッ カイ。”（おやしきことばばかり！）とも強調した。いろいろな言いかたが、多くあったのだろう。

旧須古村は、もと、小藩の城下であり、一つの地方文化圏であった。平野の中の集落ではあるが、今も、上例で明らかのように、強い伝承力を見せてい

る。ここの方言文化圏の存立の根づよさがみとめられよう。

伝承性は、重視すべき特性である。事物の伝承は、だいたい、孤立的ではない。何の種類のものも、二・三、三・四の関係事項が、あい寄り、あいまち、たがいに牽引しあって、ともに伝存する。私は、このことを、関係遺存などと呼んできた。古語の場合にしても、「ゴザル」ことばがあれば「召す」もあるというぐあいに、ものは、関係して——孤立的でなく——遺存する。そうなりがちである。それは、もっともなことではないか。関係遺存で、つれあいがあればこそ、ものが、牢固として残りどどまってもいるのではないか。「どうどうしヤル」というような「ヤル」敬語助動詞が、田唄の中にだけ遺存しているという事実（——方言圏の中で）も、「ヤル」ことばと田唄との関係遺存である。「ヤル」は、こういう関係のもとで、廃滅をまぬかれているのである。発音上でも、「シェ」を言う方言で、「クラ」も聞かれることはすくなくない。「シェンシェー」（先生）や「クラシ」（菓子）などの諸発音法が、関係遺存で、残りどどまっているのである。

関係遺存の事態において古いものを見いだすことは、比較的容易であって、一個特定の古事実の孤存を証明することは、通常、容易でない。古音、語頭〔P〕音の存在を方言上で証明することは容易でなく、また、「そうろうことば」を方言上にみとめることは容易でない。（世に言う「どこそこのそうろうことば」も、文末のつけそえことば、「ソラ」（そら、ほら）などの、転訛形だったりしがちである。）

さて、文化の中心地と言えるような所の方言の場合は、なにごともうごきがはげしくて、伝承性は比較的弱いこと、言うまでもない。そういう方言では、方言としてのまとまり、方言の輪郭も、はなはだしくあいまいなのがつねである。——（方言圏が明白であるようなら、閉鎖的傾向も強くて、伝承性は強いはずである。）ところで、大阪市内でも、戦前までは、「船場・島の内」ことばの伝統が、かなり明白だったらしい。その伝承は、今日でも、調査によって確認することができる。都会の中にも、存外に強い、伝承のとりでのあることが、時にみとめられる。大東京の中にも、神田っ児気分とか下町ことばとかの

伝統が、今もあるのだろう。大阪方言とか、東京語とかいうものを、——ばくぜんとしたものではあるけれども、みとめるとすれば、そのようなものの中にも、ふしぎな伝承性はあるものようである。

文化の中心地から離れた方言の場合は、さっそくに、問題なしの伝承性がみとめられるとしてよからう。しかし、こんな場合にも、なお、他面、事項の変改も、かなりおこっており、変改の自由性とも言うべき特性がみとめられもするの、注目すべきことである。なににしても、方言のことばは、無記録の、口頭のものである。伝承・残存にも見るべきものがあれば、他方、変改にも見るべきものがある。その変改は、共通語での通則からは、想像もできないような変改であったりもする。奈良県吉野郡山地の川上村の上多古部落では、つぎのような言いかたを聞いた。（上多古部落は、これなりに、一つの小方言社会とみとめられた。）

○アンタ ソコ チカ ヨ。

○アンタ バカ チカ ヨ。

前者は、「あんたは底力があるよ。」、後者は、「あんたは、ばか力があるよ。」の意である。まことに自由自在の語句製作・文法製作である。まったく、共通語の習慣からは、上記二文が、すぐには理解しがたいであろう。人は自由に、このような変改・創作をやっていくのである。何の拘泥もなく、何のためらいもない。上のは、子どもたちの世界にできた表現法のようにであったが、まさに、子どもたちは、このような創造の天使である。頑是ない子が、ひとりの創意で、「ゆるめる」の反対語「キツメル」を創作する。あるいはまた、雪の降るのをふしぎそうに眺めて、古来、いかに多くの子たちが、その自由な発想の立言をしたことか。方言のおとなもまた、自由な創作に参加する。尊敬表現法の「行かれて」（お行きになって）のようなのを、「行けて」としている所など、関西地方に見いだされるが、これは、転訛を自由におこなって、新しい文法を創作したものである。

小方言文化圏の自由性という特性をとり立てることは、ゆるされよう。言語生活の保守性と進歩性とを共存せしめているのが、方言である。



そのような共存を、言語世代に即して注目することは有意義である。兵庫県但馬、養父郡「大屋・口大屋では、大人がオキュー、若者がオキョー、学童はオキロー」を用いるという。古い形式「オキュー」はおとなのものであり、若い人たちは共通語的な「オキョー」を持っている。そうして、学童たちは、「起きよう」に近いとも見られる「オキロー」をひきおこしているのである。

保守性と進歩性という問題は、けっして言語上にとどまらないであろう。社会内の世代に即して考えてみれば、そのことは明らかである。こうして、自由性もみとめられる方言の、方言圏が、まさに、方言文化圏としての意味を持つことが、首肯されるのである。

## 2. 1 大 方 言 文 化 圏

大方言の文化圏ともなれば、隣接圏との流通の関係がかなりよくみとめられて、圏域が明瞭でないことは、さきにふれた。それにしても、大方言の文化圏も圏である。やはり、その境域には、時に、ゆるやかにではあっても、それ相応の地域的特性がみとめられる。近畿方言の独自性を見られよ。近畿方言圏は、中部以東の、東国系の方言文化圏とは大いに色調を異にし、また、四国方言圏とさえも、おもむきを異にしている。また、近畿方言圏は、等しく関西に属する中国方言圏とも、かなりはっきりと対立しあっているのである。

○コノゴロワ サッパリ アカン。

このごろは、さっぱりだめだ。

という、一つの発想法・表現法をとってみてもよい。これは、近畿方言文化圏の基質にかかわるものであって、他圏の何ものでもないのである。近畿方言圏と中部方言圏とはどのように境されているかとなると、——岐阜・愛知二県下の近畿性については、精細な考察を必要とするので、簡単には境界を明言することができないけれども、そのようであって、なお、近畿方言文化圏の独自性は、比較的顕著なのである。

北陸方言文化圏と東北方言文化圏との境などは、中でも、明白にはきめかねるものである。広く長く、裏日本的方言文化圏が指摘されるからである。（北

陸方言文化圏をきめてうけとるうけとりかたが、すでに問題かもしれない。) 裏日本的なものを、なお西に、山陰地方までみとめることにすれば、こういう長大な方言文化圏は、表日本的なものと同対立しあう、意味ある方言文化圏とうけとられるのである。

東西両方言という、日本語方言の大区別が、古来ある。この区別も、実情を注視すれば、分けて分けにくい、やっかいなものである。しかし、ばくぜんとはあっても、東方言文化圏と西方言文化圏とをみとめている人は、多いだろう。やはり、大まかながらも、方言圏の、大きい二大部分のみとめられるのに即応して、人はしぜんに、方言文化圏をみとめている。

方言の成立するのが、そもそも、合自然的なことであった。東西二大方言のように、日本語方言が、中部以東と近畿以西とに分かれがちなのも、一つには、すでに地理風土に根ざしたことであろう。

方言文化圏とは、言語風土と解しうるものである。言語風土の上に地方生活がきずかれ、それがしぜんに地域的特色をおびる。言語風土の分派ごとに、言語の地方生活の地域性が醸成されて、その地方の方言の方言らしさが生じる。方言の輪郭は克明でない場合でも、方言の根底は強いはずである。

大方言文化圏についても、進歩性と保守性とは、やはり言える。生活の用具としての単語のごときは、どんどんと、改まり変わっていく。日常生活百般の推移がはなはだしいからである。しかし、文法面などになると、たとえば東海道方言圏というような所にしても、鉄道沿線地帯でさえ、古来の言いかたを守っていて、存外、推移が弱いとも言える。一方から見れば、共通語がよく流通していて、静岡県下など、東京地方なみの共通語生活を見せもする。それでいて、反面、地方的な「ものの言いかた」を、そのままおこなってもいるのである。御前崎方面のことばでなら、たとえばつぎのような言いかたを、中学校女生徒たちも、日常さかんにおこなっている。

○エーッヶ <sup>↑</sup>ネ。

よかったね。

○ナイッヶラ。

なかったでしょう？

○ナイッケ ヨ。

なかったよ。

○ナイッケ カ。

（“相手に聞く。過去のこと。”）

○ヘンダッケ ヨー。

変だったよ。

○インケ ヨー。

“そこにいなかった。”

東京語などでと同じように、

○イタッケ。

いたよ。

などとも言う。それでいて、なお、「ケ」の、上のような用法をも見せているのである。（「アッタッケ ヨー。」とともに、「それと同じもの」という「アルッケ（アッケ） ヨー。」を存している。）この種の方言習慣は、本県内に、なお広く見いだされるらしい。このような文法が、根づよく、その風を保っているのだと解される。こんなのが、おそらく、隔世遺伝的にも、後に伝えられることであろう。関東の「ケ」とはちがった「ケ」が、まだまだ長く、当地方に残ることかと思われる。

大方言文化圏であると小方言文化圏であるとを問わず、そこには、方言人を見とめることができる。方言人は、一般に、無自覚のうちに、言語の流動を惹起し、言語の流動推移に参与し、一方でまた、古風な言語自覚を持ってもいる。自覚の一つとして、“ここの土地のことばはわるい。ミトモ ナイ ことばじゃ。（南紀例）”などというのがある。また、民衆語源説などと言われる語源観がある。（——こういう語源観も、古風な言語自覚の一つと言えると思うのである。）古老たちは、この種の考察を愛好してもいる。一例をあげよう。奈良県吉野部川上村上多古では、一老男氏が、

○ヤレ キョーダ ヨー。

というのは、“びっくりした時に言う。”もので、“京都という所は遠い所や。行けんというわけや。”と解説した。「けうとし」の「キョートイ」についての説明だったのである。古風な言語自覚が、存外強く、言語の伝承力となっているかもしれないと思う。

### 3 言語の伝播流動と周圏・周布

上位次元の大方言圏を考える段になると、私どもは、はっきりと、全国方言状態に対する中央語、ないし、「国の文化の中心地」を考慮することになる。たがいに関連しあう大方言圏の相互状態からは、当然に、その成因としての「中央語とその言語伝播」を、考えざるを得ないのである。

じつは、どのような小方言圏の成立に関しても、中央語または地方的な中央語とその影響とは、考えないではいられないことである。中央語、または地方的な中央語（たとえば北九州地方での博多弁）が、その勢威を四周におよぼし、この言語伝播・言語流動が傾向となって、地方の地域地域に、方言圏ないし方言社会が生じる。

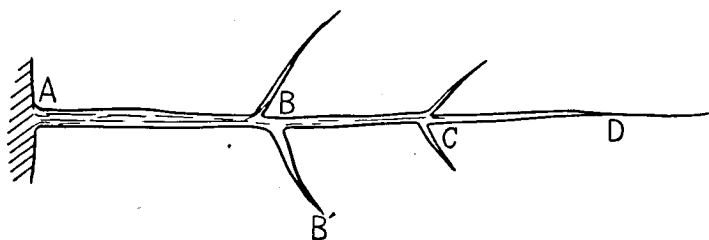
もとより方言圏は、ただ他律的に、他から影響を受けるだけで成り立つものではあるまい。受容傾向を基本としつつも、地域自体が、なんらかの自己形成作用をも演じて、方言は成り立つものと思われる。が、ここでは、しばらく、国の文化の中心地、中央語、——あるいは地方的なその、四周への影響について、考えてみたいのである。

中央から地方に、ものの影響の流れるのは、うたがうことのできない、きわめて一般的な事実であろう。これは、今日の文化的影響の一種、音楽や映画の地方的流布を見ても、よくわかることである。東京でまずおこなわれたものが、たとえば大阪に来て、広島・福岡におよぶ。時には、広島をとばして、早くも福岡におよぶ。（時に、広島は、福岡のあとで、そのものを受容するのである。）そのように、影響は、俊敏に地方へ流布する。流れる。

原則的に言うと、この影響流布は、周圏という状況になる。すなわち、言語伝播で言うと、中央語の影響は、池に投じた小石の描く波紋のように、——波

紋また波紋と、四周にひろがる。中央からの、ものの伝播流動は、周圏と呼ばれる様相を呈するのである。

原則的に言って周圏である。国語の方言のうまれる国土は、円い池の水面のような単純なものではない。言語伝播のさいの伝播流動のしかたは、池の波紋が同心異円に秩序よくひろがっていくようにはいきかぬる。——いきかぬるのがつねである。多くは、川の、下から上に、ものが伝播していくようになっていくようである。このさい、川口のAから、この川を上っていくものは、川のBの所で、支流にも分かれそって上っていく。Cの所においてもまた、そうである。ものが、支流のB'に達するころには、本流つたいの伝播流動の方は、ものが、おおかたDに達したりもするであろう。



地理的条件等によりつつ、ものはともかくこの川の流域に拡散する。(民家はおもに川ぞいに集落をなす。ものが川の流域に拡散するとは、ものが、土地の人びとに、そのようにうけとられるということである。) このようなひろがり、伝播の状況を、私は周布と呼ぶ。原則的には周圏と考えられることも、こまかくその周圏のすじ道を追えば、周布と見られるのである。いわば、事象は、大きく周圏しながら、こまかく、周布の道をたどる。中央語、中央文化の地方影響は、河川に河口から汐がさしてくるのに似た状況で、流動浸潤するのである。

言語流動も文化流動も、文化の中心地からの自然流動となる。流動には、もの(文物)そのものの流動する場合のほかに、文化・言語の、変動の可能性の流動波及する場合もある。——受け入れ態勢そのものが、連鎖反应的に、地方地方に発生する場合がある。いずれにしても、いっさいは、文化流動と呼べよ

う。それはおおよそ、自然流動即合目的流動なのである。

自然流動を、時にはなはだしく抑止するものは、人為の歴史的事情である。要するに、地理的歴史的事情によって、文化流動・言語流動は促進され、その周圏・周布の伝播の結果として、文化流動・言語流動のかたまり・まとまりが生じる。それが地方文化圏であり、地方言語圏（——方言）である。——それに、大・小のできることは自明であり、観察の次元を替えれば、小方言も、大方言に、統合してうけとることができる。

圏の成立を促すおもな自然的条件は、山地山脈であり、河海・湖沼であり、時に森林・原野である。

周圏の結果によりそって、文化地理学的な発言をすれば、こう言える。同中心異円の各円周上には、東西南北をたがえながらも、同様の文化状況・言語状況が見られる、と。たとえば奥羽と九州とに、同様の言語状況が見られても、ふしぎではないとされるのである。話しことばの抑揚の、「あと上がり傾向」とでも言うべきものが、上記の両極地方に、等しくうかがわれるのを、私は興味ぶかく思う。（拙著「方言学」p.365参照）最近は、これに関する資料を、徳川宗賢氏が、「ことばの宇宙」6<41年6月>に発表された。（その論題は「日本語の母音と子音」である。）他にも、この両極地方に共通に見られる、興味ぶかい事象がいくつもある。たとえば「オ出アル」の転「オチャル」とその訛形を、双方が共に有している。「オチャル」は、この両極のほかにも、点点と存し、八丈島などの、南辺の極地には、またそれが著しく存しているのを見ると、そのむかし、「オチャル」ことばは、京都中心に栄えて（そのことは文証明白である）、それがよく四周に波及したこと、——あるいは、「オチャル」を生ぜしめる可能性は、よく四周に波及したことが、察知されるのである。今日の、奥羽と南九州とに著しい「オチャル」は、まさに周圏周布の一致と見られる。

日本海がわについて、さきに裏日本文化圏を云々した。裏日本がわで、東北のいわゆるツーツー弁に通うものが出雲地方にある（隠岐でも、そのことが問題視される。）ことも、周圏的一致と見た時、いかにも合理的な事態と理解さ

れる。はたして、山陰の奥丹後地方にも、北陸方面（ことに能登）にも、関連事象が見いだされるのである。みな、周圏周布のはての残存現象と解される。残存結果の、相互一致が、裏日本線上にみとめられるのである。

残存しているものが、左右にたどられ、それらが一系の事態とみとめられるのによって、私どもは、方言分派——の地方的存在の、系統脈絡、系脈を云云することができる。系脈もまた、自然系脈である。

伝播理論を周圏周布論と呼ぶ。結果として生起した文化圏を、周圏周布的文化圏と呼ぶ。周圏周布的文化圏にどんな断続があっても、注意ぶかく観察し研究していけば、そこに、系脈がたどられる。系脈論の立場もまたありうる。

### 3. 1 周圏・周布と辺境

周圏周布の結果の、おもしろい事実がみとめられやすいのは、とかく国の辺境においてである。周圏周布論では、当然、辺境が興味の対象になる。

国の辺境を、二とおりに分けて考えることができる。一つは、国土周辺というような辺境である。東北地方や九州地方は、国の大辺境として、周圏周布論上、まず注目される。九州でも、南部にいっそう注目すべきものがあり、つづいて九州西辺海島に、注目すべきものがある。一口に言って、このような辺境には、古態の国語事実の残存することが多い。薩隅方言の、あの異様とも思われるような方言状態も、要するに、<sup>↑</sup>国の辺域での、古態残存によるものなのである。「マタ オサイジャッタモンセ。」（また、いらっしゃって下さいませ。）などという、変わった言いかたも、もともと、「また、お差し出あってたもり申せ。」という慇懃な言いかたで、これは、近古の中央語の習慣の伝承そのままである。辺境に、古態残存とともに、また、自由な改新の事態もあるのは、反面、注意すべきことである。東北地方に、たとえば助動詞「なさい」の、つぎのような用法がある。

○ネマラサー。 <ねまりナサイ>

すわりなさい。

（新形「サー」の成立と、その新たな承接とが、ここにみとめられる。） 辺境

の、二面性とも言うべきものが考えられる。

九州地方について、さらに南方の琉球方面を見れば、これこそ境界であつて、琉球語は、日本語の姉妹語かとも見られるぐらいに、現代日本語とは大いにちがった様相を示す。しかもその中には、たとえば「上がる」の「アガイユン」など、特に古い動詞形式があり、他面また、三母音組織など、特に変改したものがある。

国の境界として、もう一つ、つねに考えることができるのは、たとえば四国の内部での、谷あいの奥地とか、関東地方での、利根川の川上とかいう境界である。谷あいに、村落が並んでいると、きまつて、最奥の小部落に、おもしろい境界事実がある。また、川にそつて溯つていくと、その枝わかれごとに、最奥の部落に、注目すべき境界事実がある。海辺、島嶼でも、また同様である。海岸づたいに、岬の先の部落へ行くと、そこに、きまつて、そこへ来なくては発見することができなかつたような事実がある。瀬戸内海域の、いくつかの列島でも、その列島の島を伝つて、一ばん先の島まで行くと、やはりそこに、注目すべき境界事実のあるのがつねなのである。

境界について、言語周圍周布の所産としての境界方言を見ることができ、境界方言に、新古二重の性格をみとめることができる。

なぜ、境界に、この二重性格がみとめられるか。境界は、風の吹きだまりのような所である。周圍周布の結果、流布してきたものが、ここでは、吹きたまつて、そのままにとどまり生きる。これが古態遺存になる。一方、この吹きだまりの地域に来て、押し寄せてきた風は、吹き舞う。この吹き舞うはたらきによって、ここに、しばしば恣意的とも見られる、自己変改の作用が起こる。（言語上のことに限らないと思う。）この結果、ここが、近隣にないものを持つことにもなる。——それが、その新生面となる。

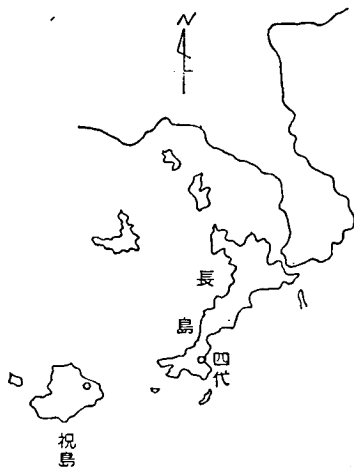
### 3. 2 境界変移の説

境界では、たしかに、ものが自由に變改せしめられもする。これを、境界變移と呼んでみたい。



山口県下の内海島嶼に、祝島がある。その位置は、図のとおりである。このような地位の祝島にも、たしかに、辺境変移と呼んでよい事実がみとめられるのである。

この祝島には、たとえば発音上で、 $[t^{\circ}u]$  のおこなわれることが、およそ一般的である。人びとが、これに気づいてもおり、佐賀県で笑われたなどとも言っていた。ある婦人は、この島に入嫁して、この  $[t^{\circ}u]$  に気づいていて、“英語の t の発音のようだ。”と言っていた。



(対応する  $[d^{\circ}u]$  は、ほとんど聞かれなかった。すくなくとも、 $[t^{\circ}u]$  が男女老若にあるのに対しては、 $[d^{\circ}u]$  は、言うにたりないもののようにである。) ここの  $[t^{\circ}u]$  の発音法は、古い習慣の残存と言えるかと思う。古いものの伝承・残存を指摘しうる反面、この島での新傾向かと思われるもののいくつかも、指摘しうるのである。たとえば、

○キレーナ ヤ。

まあ、きれいだわね。

と言う。

○ウー<sup>↑</sup>ラ、キレーナ ハナ ヤ。

わあ、きれいな花ねえ。

と言う。これらの「ヤ」が目される。「ヤ」は“調子ことば。何の意味もないが、つける。「ね」に当たる。”という。まず、この辺の他地方では聞きかねる「ヤ」のことばづかいである。「ヤ」を、このように、自由につかう習慣を、自生せしめていると見ることはできないか。「ヨ」という文末詞を、

○ネ<sup>↑</sup>ョー ヨ。

寝なさい。

などのようにつかうのも、「ヨ」について、一つ、新しい用法を成立させたものと言えるか。「食<sup>ワ</sup>ん<sup>ケ</sup>ニ（から）」とともに、祝島では、「ク<sup>ワ</sup>ん<sup>ケ</sup>デ（から）」を言う。中国山陽一般には、「ケデ」を言うまい。祝島が、みずから「ケデ」を創作したのではないかと思われる。祝島ではまた、

○ダ<sup>レ</sup>カ ワ<sup>シ</sup>オ タ<sup>ケ</sup>ル <sup>ゲ</sup>ーナ ヤ。

だれか、わたしを呼んでるらしいわ。

のように、「のような」「らしい」の「ゲナ」を「ゲーナ」と言う。「ゲナ」を「ゲーナ」にして、この長呼形を一習慣にしている。ここの文アクセントに、また、注目すべきものがある。

○ワ<sup>タ</sup>シ<sup>ラ</sup>ガ、……………。

わたしが、……………。

○ガ<sup>ッ</sup>コ ソツギョー セル<sup>マ</sup>ジャー、……………。

学校を卒業するまでは、……………。

○ア<sup>ガ</sup>ラン<sup>デ</sup>ス ヨ。


上がらないんですよ。

○ス<sup>ワ</sup>リン<sup>サイ</sup>。

すわりなさい。

○バ<sup>ン</sup>ビン<sup>エ</sup> ノッチョ<sup>ル</sup> ブ<sup>ン</sup>。

（あの船長は）晩の便船に乗ってる船長です。

のようなものである。傾向として、のような型をとりがちなのが注意される。おもしろいことに、この文アクセント傾向が、まったく、祝島の著しい特色なのである。中国弁の語アクセント体系を保有しつつも、文アクセント上では、ここだけ、くっきりと、このような特色を示す。興味を持って、祝島の手まえの長島を調査してみたところ、祝島に近くて、関係も比較的深い<sup>しだい</sup>四代部落に、いくらか、あるいはほんのすこし、類似の傾向がみとめられた。だが、言うにたりない。祝島に、上記傾向が断然さかんである。（一人の古老は、“四代とことと、ふしまわしが、マルツちがう。”と言った。）四代にも徴候はあり得て、祝島にさかんであるこのもの、おそらくは、風の吹きだ

まりのような祝島で、しだいにさかんになり得たものであろう。「スワリンサイ。」のように、文頭に強調高音のくることは、ここに限らず、起こり得ていることでもある。それらは多く、後生形式かと察せられる。祝島のも、後生形式であろう。その生起の可能性は、手まえの四代にもあって、しかも、祝島が究極の行きどまり地点なので、このような変移が、ここに一段と露骨に起こったのではないかと思う。以上の諸相、変わっている事象が、たとえば九州の国東半島からの直接影響によるものなどではないようである。（私の国東半島調査のことは、述べるのを省略する。）列島状の、一連の海上地帯の突端に、こんなに変異の事実のあるのを、私は、辺境での自然変移と見たい。ここが、みずから変改の作用をおこして、こういうものを示すにいたったのであろう。

辺境での変移現象は、内海の、備中に属する神島・白石島・北木島・真鍋島の列島の上でも見いだしうようである。先端の真鍋島が、風の吹きだまりの土地で、ここに諸種の変移が見いだされる。その中に、またしても、文アクセント上の注目すべきものがあるのはおもしろい。

○イラン ノー。


いらなの？

○シラン ノカイ。

知らないの？

○グラン スルンデス ガナー。

願を立てるんですよ。

これらは、祝島のと同様、型と見られよう。いま一つ、注目すべき型がある。

○アタマ カカエテ……………。



頭をかかえて……………。

○イママデノ コドモ<sup>↑</sup>ワ、……………。

今までの子どもは、……………。

○アルノニ ナンデ コンノジャロー。

あるのに、なんで、こないんだろう。

これらに、のような型がみとめられる。（これは、九州の南部から西辺によくみとめられる傾向に酷似している。四国内では、伊予南部内のほかでは、このようなものは、ほとんど聞かれない。）以上二つの変異型が、四国がわからの何かの作用・影響によったものなどとは、考えかねる。やはり、辺境、列島最後の極地、真鍋島での、自然の変移現象かと察せられるのである。——真鍋島の手まえの手まえにある白石島に、「ラスレシ フォー。」（忘れないのよ。）など、型に類するものが聞かれる。これも、真鍋島に起こった変移の、生起の必然性を語っているものではないか。

中央から隔絶している所、たとえば八丈島のような所での、「辺境変移」の生起と、列島の先端の島というような所での、「辺境変移」の生起とには、差別があろう。前者の場合は、中央からの直接影響の外で、自由な変移を起こしうる。後者の場合は、列島を順当に伝わってくる、ある文化中心からの影響を受けつつ、変移を起こすのである。その変移は、「入来した風が、その最後の地点で吹き舞う」のによってひき起こされる何かの変動というような変移になるであろう。

いずれにしても、辺境では、たしかに、変移が起こる。辺境を、大きく、東アジアの日本列島に見いだしても、興味ある考察が成り立つ。日本列島上には、なぜこのように、世界の諸言語から遊離した日本語が成立しているのであろう。おそらくこれも、「辺境変移」の説で説明しうることなのだろうと思う。この日本列島に、他から諸種の文化的影響が流入したとする。北方からそれが来ようと、南方からそれが来ようと、要するにここは、風の吹きだまりになる土地である。吹きこんできた風は、この国土の上で吹き舞う。そこに、自己作用、自律作用の何かが起こったにちがいない。辺境変移である。日本の歴史が古ければ古いほど、この自己作用も、土地に深くくい入ったものとなったはずである。日本語が、異風の一言語として立つようになったことも、けっして偶然ではないと思う。文明論の方法としても、辺境変移の説は、利用しうるのではないか。文化変容については、一つ、「辺境変移」で説明されるものがあると思う。

私は、辺境変移の説が、一般言語理論たりうることを期待する。

#### 4 方言社会の人為製作

昭和14年初、宮崎県児湯郡下をたずねたおりのこと、四国から来住の、紙すき業の小集落を見学することができた。そこはだいたい、四国弁の方言社会だったように思う。最単純な「方言社会の人為製作」を、このような職業集団の移住に見ることができる。

むかしの藩政時代、領主の転封によっては、方言社会の顕著な人為製作もおこり得た。佐賀県唐津市に、「城内ことば」と「城外ことば」との別がある。昭和14年末の調査結果によれば、城内ことばは家中弁で、小笠原侯来封によって伝えられた、関東系の方弁である。たとえば、

○ゴメンナサイマシヨ。

ごめん下さい。 <訪問あいさつ>

○マー オアガンナサイマシヨ。

まあ、どうぞお上がり下さいまし。

のように言う。城外ことばでなら、おのおのは、

○モーシ。

○コレー。

○サー アガランデス カ。

○サー アガラン ケー。

と言われる。大いにちがおう。城内ことばでは、「これは私のだ。」というのでも、

○コリヤ ワッ チンダ。

○コリヤ、カーチャン、ワッチンダカラネ。

と言う。“東京のことばは唐津のことばとすこしも変らんぜ。だからすこしもはずかしくないぜ。”と、ある母おやが子に言ったという。城内ことばの社会は、いわば異種の方言を以て、異風の方言社会となり得たらしいのである。転封が、はっきりと、このことを可能ならしめたようである。（ただ、その方言社会の勢力と輪郭とが、どんなものであったか、今、知ることができない。）

#### 4. 1 藩領と方言境界線

一般に、旧藩治の旧藩域が、どんなに鞏固なものであったとしても、その方言社会の、今日に見る輪郭は、旧藩域どおりに明確ではない。

### 5 方言社会の運命

多くの方言社会に対して、共通語文化の波がおおいかぶさっていく。方言文化圏は共通語文化圏化される。しかし、地上の地域と、その地域性とは、容易には亡びないであろう。なんらかの意味の地域社会は、ほとんど永遠的にも、生成存立するものと見られる。

したがって、地域社会に即応する地方語（方言）社会もまた、ほぼ永遠的に、存立するものと考えられる。

方言社会は存在しつつ、方言社会文化は、日々に改新されていくであろう。

ともあれ、「方言社会」の存立していくこと自体が、すでに、興味ある地方的文化現象だと思う。

(41. 8. 1.)

(国語学国文学教授)

In this thesis I have tried to consider about this complex relation between Culture and Society through reading T.S. Eliot's *Notes towards the Definition of Culture* and Tetsuo Watsuji's, *Climate—its Philosophical Study*, and to point out especially the fact that in the modern world the case in which a Culture brings about a new Society has come to be a most urgent problem to be solved. That is to say, we may think that the cultural history of the world is now going to turn from the stage of natural culture to a new stage of, so to speak, intentional culture. And if this is true, the problem of education must naturally be the central problem of the culture to come. The problem of Culture and Society at present moment, it seems to me, will come to be reduced to the problem of what the aim of education should be in our time.

### Problems of "Culture and Society" in Dialect

Yoichi Fujiwara

A dialect is itself a systematic existence of language and makes a dialect society, spreading over a region of some extent. A dialect society is, at the same time, a dialectal culture sphere. A dialect society, i.e. a dialectal culture sphere, can be larger or smaller. Viewed from a higher stand point, dialect societies of lower degree are gathered into a larger dialect.

What characteristics are recognized in the smaller dialect society, i.e. the smaller culture sphere, a typical case of which is a small village? One is its closedness. A smaller dialect society is closed, conservative and lentegrressive. The force of the tradition is seen there. On the other hand, a smaller dialect society has its own innovativeness. These two characteristics—closedness and innovativeness—are recognized also in larger dialect societies.

When we try a bird's-eye view of the dialectal conditions and dialect spheres in Japan, we can instantly recognize the linguistic flowingout

from the cultural centre to its circumferences. Concerning this flowing-out, we have already the so-called "Wave Theory". In this paper I have followed up the movements of "the waves" and developed a practical distribution theory.

In regard to the distribution, the border districts are liable to come into question. In the border districts, both conservativeness and innovativeness exist. The effect of the latter, i.e. the innovativeness in the border district may be summed up in a general theory called "the Border Shift Theory".

At times a dialect society can be artificially formed. In feudal clans in Japan, social dialects or dialectal culture spheres were often built up artificially.

Dialect societies will still survive for ever coinciding with the everlasting existence of regional societies. This must be also an interesting cultural phenomenon.

## On the Genealogy of the Japanese Female Language

Saburo Mashimo

In the ancient age, Japanese women spoke the language which was the same as men's. But in the course of history the discrepancy of the language between women and men gradually came out. It was because of the trend that women had to be graceful in human relation. Since then in the Japanese language, very numerous words have been used by women only.

In the middle of Muromachi Era (1338—1573), women called "Nyoboo" (女房) who took the service in the Imperial Court (御所), created a large number of words put into use by themselves. In later age, we call it "Nyoboo-Kotoba" (女房詞). In Edo Era (1603—1867), Nyoboo-Kotoba was also created continuously, and therefore its words were very numerous; about 1,500 words.

examples Omusubi (おむすび) means "rice-ball"